
にやににゆにえによつ！

七島 希意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にやににゆにえによっ！

【コード】

N8091U

【作者名】

七島 希意

【あらすじ】

ただの夢小説的なもの。
半年以上前に書いたものなのであまり上手では……。
でも、今の方が下手です。

そんなことはどうでもいいっ！
あらすじ…主人公は自分っ！！

草食・風丸くんに回り道して愛さねちゃってくださいー！ー！

勉強なんて嫌だなあ… (1) (前書き)

え。なにこれ。恐ろしい。

携帯に入っていたモノをそのまま持ってまいりました！

一切手を加えていませんっ！

ためてあったので、しばらくは毎日更新できるかな？かなっ？

勉強なんて嫌だなあ…（）1

「勉強がわからなすぎまーすっ」

「授業中、寝てたよな…！！」

風丸がシーズンの頬を軽くつねる。

「いたい…っ」

「ったく。今までの分を取り返すのって結構大変なんだぞ！？」

風丸が1年の時の教科書に目を通す。

ただいま受験生、真っ只中。

2年を終え、ライオコット島に行ったり色々してきて世界という高い壁を乗り越えた訳ですが、

次は個人戦。

受験です。

みんなで同じ高校に行こうという訳です。
目指すはサッカーの強い、市立雷門高校！
ちなみに偏差値は45とやや低め。

だが、偏差値39を誇る、いわゆるバカと言われる私には高い……。
同レベルの円堂はサッカー推薦でいけるだろうし（たぶん）、風丸
や豪炎寺、鬼道はサッカー推薦なんてなくても成績が成績で確実。

他にもサッカーでいけて……。

マネージャーをやっていただけの私は大変。

と、いうことで勉強会を催すことになったのだ。

理事長の娘である雷門夏未が学校の合宿所を特別に借りてくれて、
現在合宿中。

「夜通し？」

「昼間にさっさと終わらせる」

一応、幼なじみである風丸が一番の問題である数学と英語を担当し

理科は鬼道

社会が豪炎寺

国語が秋ちゃん

と分けられた訳である。

風丸が呆れた顔で問題集の問題を指差した。

「これやって」

英語の問題集。

問題は並べ替え。

「英語なんてジャパニーズぶりーずって言えば……」

「外国人は日本語使えないよねえ」

「う……っ」

風丸の鋭いツツコミが入って黙り込む。

「じゃあ、何で英語？」

「世界共通語だからでしょ？」

シーズンが恨めしそうに風丸を見た。

「何で英語が風丸の担当？」

「俺がシーズンの幼なじみだから」

華麗に返して問題集を指で軽く叩いて示した。

「バカ……ばかあ……」

「はいはい。早く」

軽く流され、仕方なく視線を問題に移す。

「まだ9月だからさあ。間に合うよ？」

「何？……突然」

風丸がいきなり話し始める。

「シーズン、このままだと落ちるよ?」

「……………」

「頑張ろう?」

「……………わかったよ。わかった」

風丸の方を見た。

風丸がニコリと笑う。

シーズンの頬が微かに赤くなった。

「頑張る。みんなと学校行きたいし」

「良かった」

そう思っただけならなにかやる気が出てきた。

でも、

「わからない」

「これ基本なんだけど……………」

風丸がため息をつく。

勉強なんて嫌だなあ… (1 (後書き)

えー。偏差値とか知りません。

高校生ですけどね (エヘッ

大丈夫！勉強描写なんてありませんっ！

馬鹿すぎてできません！

田舎H・・・(2) (前書き)

昨日に引きつづき投稿っ！

たまっているのって楽ね。楽。

あ、毎日の時ちよつべに更新するよつになつとります。

こつなると続き書かなきゃ…

円堂「……………」

「これは……………」

「じろじろどっかーん！」

遙か昔の試合のフレーズを言いながら円堂が入ってきた。
やけにテンションが高い。

「どっした？円堂」

「勉強がわからなすぎて、ちょっと大きな声が出したくなった」

円堂がへへっと笑う。

「円堂っ！」

風丸が怒った。
立ち上がる。

「知ってるのかっ？」

「んあ？何をだ？」

「赤点ばかりとつてると部活停止になるんだぞ！？」

「……うえええっ！？」

「1ヶ月だ。1ヶ月！お前はもう、2回連続5教科赤点だ！3回とるとアウトだ！」

風丸が拳をつくって熱弁する。

「嘘言っなよ！」

「本当だっ！」

「本当よ」

ドアから夏未が顔をだした。

「生徒手帳にも書いてあるでしょ？」

シーズンが自らのスクールバッグを引き寄せてポケットから生徒手帳を取り出した。

「えーとっ」

「38ページ」

生徒手帳に全部、目を通していないシーズンが迷っていると夏未が言った。

「あ、あつた」

シーズンが風丸に生徒手帳を渡す。

ポケットのチャックを占めると立ち上がって風丸と円堂のしている生徒手帳を覗いた。

「本当だ……」

円堂が絶句した。

「だろ？」

「40点以下が赤点扱いか」

「シーズンは俺が理科だけを猛勉強させたから大丈夫だな」

「うん。お陰様で初めて70点がとれた。今までで最高点」
夏未が笑った。

「35点以上なら簡単だと思うけど？」

風丸とシーズンが円堂に目を向ける。

「簡単だったらこんなことになってないよ」

シーズンが「確かに」と呟いた。

「とにかく、これは学校が決めたこと。逆らうことは出来ないわ。
頑張っつてね？」

「今気がついて良かったじゃないか」

風丸が円堂を励ます。

「1教科だけ集中してやればいけるよ」

「円堂。気合いと根性があれば何でも出来るんだろ？」

風丸がなつかしのフリーズを出してきた。

「頑張る」

「頑張れ」

田舎H・・・)(2(後書き)

明日も頑張って更新ですな。

また見に来てくれると嬉しいなっ

ガールズトークしようぜっ！)(3)前書き(

引き続き頑張りますっ！

・ 自分用に書いてなんにも手を加えてないので描写とかないですエ・・・

この物語は特に主人公というものがいません。

たぶん。

ガールズトークしようぜっー！）（3

夜。

勉強のハードスケジュールを終え、女子の寝る部屋の布団に寝転がった。

「はうーっ」

「シーズン先輩。だいぶお疲れですね」

ちなみにサッカー部は何故か全員参加である。

「春奈ちゃんは疲れてないね」

「はいっ。みんなでトランプやったり楽しかったです」

なんか他の人は勉強しないで楽しく遊んでいたらしい。

勉強合宿ではないのかとツッコむ気力もない。
脳みそが溶けそうなのだ。

各自の布団に入り、電気を消した。

だが、いつも夜遅くまで起きているせいかなかなか寝付けない。

と、

「先輩方。ガールズトークしません？」

春奈ちゃんが暗闇のなか3人に話しかけてきた。

「まず、木野先輩と夏未先輩はキャプテンにいつ告白するんですか？」

勝手に始まり勝手に質問。

「なんかいい質問だね。春奈ちゃんっ！」

話しに入りたくなった。

「あと、シーズン先輩は風丸さんとどうなんですか？」

「はい………？」

一気に無視したくなった

が無視するわけにもいかない。

「私も出しにされた！2人とも起きてっ！」

「……わかった」

「……しょうがないわね」

渋々2人が返事した。

「シーズン先輩」

「私からいくのっ!?!」

「お願いしますよ」

「いや、2人からにしようよ……」

なんだか殺気のようなものを感じた。

「別に話すことなんてないけど……」

「じゃあ質問しますっ!」

「う、うん」

なんだか嫌な予感。

「どこまでいきました？」

「はあ！？」

「聞きたいわ」

「私も」

2人ものってきた。ヤバい。

「どこまでって……」

「キスは？」

「そんなわけないっ！」

「えー……」

「えーって……あるわけないよ。風丸だもん。てか、付き合っ
てないし」

風丸、草食男子だから。

「嘘っ。てつきり付き合ってるのかと」

「ありえないよ……」

「あ、でも手を繋いだ」とは？」

「手？……小3までは、その、」

「繋いでたんですか？スゴいですねえ」

スゴくないと思う。普通だと思う。

「だって小3だよ？」

「あ、もしかしてキャプテンとも？」

なんか、嫌な流れになった。

そう、風丸と幼なじみと言つことは「田堂と幼なじみってことなのだ。」

「田堂とは……」

空気が変わった気がする。

「風丸が繋いでた」

ホツとした雰囲気が流れる。

「私は風丸とだけ」

「えっ！じゃあ、3人で帰ってたんですか？」

「まあね」

「へー……」

春奈ちゃんから感嘆の声。

「途中、寄り道してサッカーした」

「なるほど」

「私は見てるだけだったけど」

「シーズン先輩、運動できませんもんね」

「うん。さあ、次は2人の番だよっ！」

なんか張り切ってきた。

「……………」

「えっ！まさかの寝た！？」

2人が無反応になった。

「シーズン先輩。2人で話しましょうか」

「うん」

「シーズン先輩、風丸さんとは……………」

「また、私！？」

私が引き続き話題になるらしい。

「私だけですから、ね？」

「あんまり気乗りしないけど……………何を話す？」

「そうですね……シーズン先輩はどんな人がタイプ何ですか？」

「いや、そついうのはないよ」

タイプと言われてもすぐに思い付かない。

「アフロディさんはどうです？」

「アフロディ！？ないないっ」

「でも、アフロディさん、シーズン先輩のこと気に入ってる見たいですけど」

「アフロディって見た目可愛いけど中は怖いよ？」

アフロディはああ見えて

腹黒、ナルシスト、自己中

なのだ。

「風丸さんが草食系だったらアフロディさんは肉食系ですよね」

「うん。まあ」

「どっちがいいですか？」

「えーと……どちらともいえん」

ガールズトークしようぜっ！)(3)後書き(

すでに3日目ですが、飽きたという方！

はいつ！！！！

自分が一番飽きてる。

ふふっ。コメントとかもらえれば元気になっちゃいますかもです。

時々、変な言葉しゃべりますが完全に無視してください。

ボーイズトーク（４）（前書き）

まだまだ頑張ってますよ。

さすがに編集が疲れてきました。

先に言いますが誰がしゃべってるのか全くわかりません。
きつと暗いからだよ！

ボーイズトーク(4)

一方、男子部屋

「何でさっきから俺ばかりなんだよっ！」

風丸が質問攻めにされていた。

「風丸以外は噂が出てないからだ」

「キャプテンは寝てるッス」

「だからってだからってなあ!？」

この会話に入ってしまったことを後悔した。
だが、これは自分が円堂に話しかけたことから始まったのだ。

「風丸はいつシーズンに告白するんだ？」

「ばっ、そんなこと……出来ないし」

「草食系……」

みんなが口を揃えて言った。
暗く見えていないが風丸の顔は赤かった。

「草食系って……」

以外と打たれ弱い。

「まあ、風丸らしいがな」

「らしい!?!」

「風丸さん、織細ですもんね」

「織細!?!」

「シーズンをずっと思ってるのは純粹だな」

半田が笑いながら言った。

「純粹とかじゃ……ない」

「風丸可愛いっ」

「黙れッ！」

すかさずツツコミを入れる。
笑い声が部屋を包んだ。

「シーズンのことをどう思ってるでやんすか？」

栗松が質問した。

「シーズンは……初恋？かな」

「大変ッス」

「そつでやんすね」

「何がだよっ！」

「よく初恋は叶わないっ
ていうッス」

「……………」

風丸が絶句した。

「そんなの名神だと思っぞ?」

隣の豪炎寺が励ました。

「そつだ。お似合いだろつ。お前らは

鬼道がさらに励ました。

「なら、俺の担当することになっている社会を風丸に譲るが?」

「遠慮する」

風丸がうなだれた。

「今回の合宿で告白出来ればいいッスね」

「しないよ」

「即答するなよ。風丸」

「しないから」

「ダメだな。これは」

ポイズトーク(4) (後書き)

イナゴ素敵ですね。

素敵。 剣城…そろそろデレるんでしょっね。

作戦始動っ！()5(前書き)

第5夜です！

携帯で続きを頑張ってますよ。

さて、いつまで続けて更新できるかな？

作戦始動っ！()5

「風丸さんはああ言ってたけど、やっぱり告白するべきだと思っ
ス」

「俺も同じ考えでやんす」

壁山と栗松が廊下で話していた。

「ふふふ。僕も協力してあげましょう」

「「!?!」」

どこからともなく目金が入ってきた。

「……それは面白いな」

「俺も協力する」

「「鬼道さん!?!豪炎寺さんも!?!」」

鬼道と豪炎寺も入ってきた。

「んあ？みんなこんなところで何してるんだ？」

「円堂っ！？」

「キャプテン！？」

「な、何でもないッス」

「そっか？」

円堂が不思議そうに首を傾げた。

「円堂？」

その後ろから風丸が顔を出す。

「ダークエンペラーか？風丸」

豪炎寺が軽くジョークを言った。

風丸はシャワーから出た後で髪や首に水が滴り、髪は縛っていなかった。

「違つよ」

髪をタオルで拭きながら髪をかきあげる。

「それよりお前たち。余計なことするなよ!？」

「もちろんッス」

「仲間だろ!風丸」

鬼道が親指を立てた。

「鬼道がそんなことするなんて……」

「あれっ?みんな、どうしたの?」

シーズンが現れた。

風丸がビクツと震える。

「シーズン!？」

「何?」

シーズンもシャワーから出てきたばかりのようで肩からタオルを掛け、首や髪が濡れ、雫が垂れる。服は少し大きいらしく手の甲まで袖が伸びていた。首回りもかなり余裕がある。下は短パンで膝より上で足回りにだいぶ隙間があると、ずいぶんラフな服装だった。

風丸の脈が早くなる。

「おはよう！シーズン！」

円堂が挨拶した。

「おはよう！円堂。ん？風丸、顔赤いよ？」

「いや、何でもない」

「そう？」

「シーズン。風丸がそんな格好で出歩くのはやめると言いたいらしい」

鬼道が言った。

風丸が後ろを向いた。

「え？ダメ？」

「シーズン。お願いだから」

「何？」

声が小さい風丸にシーズンが近づいた。

「本当に……」

「はい？」

「ダメだっ！」

風丸がシーズンに赤い顔を見せた。

「これ以上っ……無理。上がる……！」

「風丸っ！？」

風丸の綺麗な青い髪が舞って床へと吸い寄せられた。

つまり、倒れた。

「ちよつと!?!」

「マジかよ……!!」

「そこまでか?」

「なんでみんな助けない
んだよ!風丸、大丈夫か?」

円堂が風丸を部屋まで連れていった。

「……えっ?私のせいかな?」

「……」

「シーズン、肩」

「へ?」

豪炎寺が呆れた風に言った。
肩を見ると

「あ
あ」

少しだけ下着が見えていた。
服を直す。

「大丈夫？」

豪炎寺と鬼道が頷いた。

「まさか……これで？」

「おそろく」

「純粹すぎる風丸だからな」

「うわー……悪いことしたな」

だんだん実感が湧いてくる。

「いや、これくらいで倒れるのもどうなんだ？」

「確かに」

「これも意識しすぎたってことだろう」

「意識？」

「シーズン、所々入ってくるな」

「あ、ごめん」

シーズンが一步引いた。

作戦始動っ！()5(後書き)

少し来れなくなる可能性が・・・でも大丈夫ですよ！

予約しておきますね！

てか、こんなくだらない物語を読んでいる人がいるのか不安でいっぱいですな。

うん。風丸くんが早くデレればいいんですよね！

わかりましたっ！

・・・(6)前書き

案の条昨日はできませんでした。はい。

ではでは。

・・・()6

「何かあったのか？」

半田と染岡がやって来た。

「風丸が倒れた」

「は！？なんで！？」

「シーズンの格好がいけなかった」

「え？」

半田がシーズンに視線を向ける。

「？」

じーっと見る。

「いつまで見てるんだよっっ！！！！！！！！！！」

染岡と豪炎寺が同時に半田の頭を殴った。

「いつてえ……！！」

半田が呻き声をあげ、壁山たちが苦笑いした。
鬼道が咳払いする。

「とにかく、シーズンはその格好をやめろ」

「えー？これ、春奈ちゃんから大きいからって貰ったんだよ？下は違っけど」

「春奈から！？」

「うん。私が着ないんだったら返してくれてもいいって言ってたから返すけど……」

「な、な……」

なんだか鬼道のシスコンが発動しそうな予感がします。

「春奈あーっ」

鬼道が泣き出した。

妹の成長が悲しいのか嬉しいのか。

「着てもいい？」

「許可する」

「うわーい」

「鬼道さん弱いッス」

後輩が鬼道を見る目が変わった。

「あ、1時間目は豪炎寺の担当だよね？」

「ああ」

「じゃあ、よろしくね！」

身を翻す。短パンが揺れた。

「シーズン」

シーズンの後ろ姿に豪炎寺が呼び掛けた。

「ん？何？」

シーズンが首を向けた。

「社会の担当……風丸に代わってもらってもいいか？」

「え？別にいいけど？」

「わかった」

シーズンが進行方向に顔を向けて小走りで廊下を行った。
短パンとシャツが動きに合わせて揺れていた。

「……」

「シーズン先輩って……」

「意外と色っぽいよな……」

栗松の言葉を半田が無理やり引き継いだ。

鬼道が半田を殴った。

「いてえ……っ！だって……お前らも思っただろ!？」

「声に出すな」

「はあ!?意味わかんねーよ!」

「だから中途半田なんだ」

「そのギャグやめろ!」

半田がムキになった。
後輩チームは黙る。

「いいと思うぞ!?シーズン、少しぬけてるところがまたッ!」

「半田、そうムキになるな」

染岡が半田をなだめた。

「そこ。朝から五月蠅いわ」

一斉に視線が声のした方へと集まる。
そこにいたのは夏未だった。

「……朝から大変なようだけど。今から合宿仲間が増えます。どうぞ」

廊下の陰から現れたのは……

。。。 (6) (後書き)

これからもよろしく！

そして荒らしはやめてくださいねっ

消しましたが、ひっでえコメントが届きましたよ！

誰だかすぐに消したので確認しませんでしたけど、
次来たら確認しますよ。

その人に告ぐ！

もう。誰よ！？私の小説を荒らしに来たのは！？

こんなの私の勝手じゃないのさ。

怒ってるからって本人にわざわざ伝える必要がありますか！？

てか、見んなよ！読むなよ！

私がこんなのでへこたれるとでも？

怒るだけで全く支障ありませんが何か？

何か？

そして、家、新聞取ってませんか！おわかり？チラシないのよ！？

ふんっ。私の夢壊すなよっ！

来たのは…！？（（7）前書き）

危うく更新を忘れそうに…。

危ない危ない。

来たのは…!?() (7)

「!?!」

全員が絶句した。

「久しぶり。染岡くん、みんな」

「おはよう。みんな。今日からお世話になるよ」

「鬼道っ!」

「こらっ。鬼道の迷惑になるだろう」

と、この4人。

「吹雪!?!」

「アフロディ…!?!」

「佐久間と源田も来たのか!?!」

そう、他の学校の4人だった。

「染岡くん！寂しかった？」

「北海道からわざわざ来たのか！？」

「うん。染岡くんに会いに来たよ」

「冗談言っんじゃないねー」

「あはっ。バレた？」

「アフロディ……お前」

「僕も一応、受験生でね。今日は勉強しに来たんだよ？」

「韓国は？」

「チエ・チャンスウに使われるのが嫌になったんだよ」

「なんて奴だ」

「鬼道っ！」

「佐久間と源田。久しぶりだな」

「ああ」

「会いたかった！」

「佐久間。邪魔するなよ？」

「わかってるよ」

「さあ、みんな朝食を食べて勉強よ。これは理事長の言葉と
思ってもらって構いません」

夏未のいつものセリフが飛び出し、食堂へと向かった。

来たのは…！？（（7）後書き）

たまにはオリジナル小説でも書こうかと計画中。

絶対終わらない可能性大。

外国コミュニケーション(8)前書き

いきなり...というのもあれですのでフンクッション置きます。

ではじいね。

「え！？なんでみんな……」

シーズンがあらさまに驚いていると夏未が事情を説明してくれた。

「ああ。そうなんだ」

「シーズンちゃんっ！会いたかったよ！」

アフロディがシーズンに抱きついてきた。

「！？」

アフロディの綺麗な金髪がなびいてアフロディ独特のフローラルな香りがした。

みんなも突然のことに目を丸くする。

「アフロディ……？」

アフロデイが離れる。

「久しぶり。シーズンちゃん」

にっこり笑って応えた。

「うん。で？さっきのは一体？」

「外国コミュニケーション」

「そっか……アフロデイは韓国……って！育ちは日本でしょ！？」

「まあ、そうなんだけどね」

「外国コミュニケーションは通用しないよ」

「もちろん嘘だよ。ただ、ハグしたかっただけ」

アフロデイが髪を手でなびかせた。

「フローラル」

「僕？」

「うん」

「ありがとう」

アフロディとの対面はい
つもこんな感じだった。

「先輩。あの二人いい感じですよー」

春奈が言った。

「そうね」

秋が返事をして考え込む。

「先輩？どうかしました？」

「円堂くんがさっき、風丸くんが倒れたって騒いでたんだけど詳しい原因がわからないのよ」

「えっ！？風丸さん倒れたんですか!？」

「ええ。さつきね」

「……事件の匂いです」

「えっ？」

春奈の目が光った。

「わたし、話を聞いてきますっ！」

春奈が敬礼した。

「えっ、春奈ちゃん!？」

「お兄ちゃん！」

「春奈!何だ？」

鬼道がテンション高めに返した。

「風丸さんが倒れたって聞いたんだけど……」

「あ、その話。ああ……」

「お兄ちゃん。おかしい。なんか知ってるんでしょ？」

「まあ、春奈になら話そう。風丸はシーズンが好きだろう？」

「一目瞭然だよね」

「で、朝……」

外国コミュニケーション（8）（後書き）

映画公開決定ですね！

前売り券ゲットして今から見まくる予定でいます。

しかも黒い子の声が沢城みゆきさんだなんて…！

見るしかないじゃないですかっ！！

複雑・・・(9) (前書き)

ワンクッション。

苦手な人はいい加減逃げて！キヤ！。

「シーズンちゃん。あーん」

「アフロディ、さっきからそれやめて……」

アフロディとシーズンの掛け合いを他のメンバーが呆れた顔で見
ていた。

「……………染岡くん」

「ん？」

「僕もシーズンちゃんにしたいなっ！」

「……………してくれればいいだろ」

「行ってくるー！」

「……………」

吹雪がシーズンに近づいた。

「シーズンちゃん！あーん」

「お前もか！食べるからほっといてよ！」

「シーズンちゃん、北海道の雪並に冷たいなー」

「これ、勉強会なんだけど……」

「シーズンちゃん！」

「アフロディ、何？」

「今日は僕が勉強教えるよ」

「全部？」

「うん」

「わかった。ちょっと風丸のところに行ってくるね」

シーズンが手に持っていた雷門中デザインのオープンを着た。

下は夏末に怒られもつ着替え済みだった。

「シーズンちゃん」

「ん？何？」

「可愛い！好き！」

アフロデイが突然告白してきた。

「そんなこと言われても……」

「困るの？シーズンちゃんは僕のこと嫌いかな？」

「いや、そういうことではないんだけど……」

「じゃあさ？僕と付き合おうか？」

「えっ……。いや、それは……」

シーズンがうつ向いた。

「シーズン」

ちょうどその時、鬼道がやって来た。

「鬼道……」

シーズンがホッと胸を撫で下ろした。
鬼道がアフロデイを見る。

「やあ、鬼道くん。今日は僕がシーズンちゃんに勉強を教えるのでいいんだよね？」

鬼道は一瞬シーズンを見た。

「そのはずだったが予定が変わった。俺が教えよう」

アフロデイは薄く笑い、

「そっか。残念。またね。シーズンちゃん」

と言いきり去っていった。

「……」

「シーズン」

「私、風丸に会ってくる」

「ああ」

複雑・・・(9)後書き

10話から300字ぐらいで少なくなるかもしれませんが、許してください。

映画が楽しすぎて大変です。

仲良しだしね)(10)前書き)

すっくねえ…！

だけど毎日更新するためです。すみませんっ

「あー……どっしょっしょ」

シーズンが風丸のいる部屋の前でうろづろしてた。

「どんな顔して会うべき？……って！私は恋する乙女かつ！違う違う！風丸は幼なじみで……」

ドンツという衝撃があった。

シーズンが何かにぶつかった。

「キヤッ……ごめっ……」

シーズンが少し上を見上げるとそこには整った綺麗な顔が……

「か、か、風丸っ！」

「か、か、って……何が
あつたんだ？」

「別につ……って、近いよね！ごめんっ」

「シーズン？」

「風丸、もう平気？」

「ああ。大丈夫だよ」

シーズンがじーいつと風丸の顔を見た。

「……………？……………シーズン？」

「あ、えっ、いや、綺麗な顔だなーって」

「そうか？」

「うん。……………はあ」

「えっ？なんだよ？」

「風丸……昔から女の子に間違われてたしさ。私も男に間違われた
けど」

「今はそんなことないだろ？」

「まあ……そうだけど」

「シーズンは今の方がずっとかわ……っ」

「ん？」

「なんでもない」

「そう？あ、^レ「飯食べてないよね？私がおにぎり作ってあげる」

「ありがとな」

「別にいいよ」

仲良しだしね)(10)後書き)

公式！

夏未おめでとおおおおっ!!!

ツンデレの勝利だな！

私は何気に塔子じゃないのか？

と書いていましたが、全く違ったね

円堂監督をよろしく願います。

恋といえは(11)前書き

ワンクッションおきますよ

大丈夫な方はどうぞ

恋といえは() 11

「どつするッス?」

「鬼道さん……」

「僕も交ざりまーす」

マックスこと松野空介が半田の背中に乗り、頭の上に顔を置いた。

「マックス、重い……」

半田が呻いた。

「我慢、我慢」

他にも影野や穴戸、少林が風丸を応援しようぜ企画に参加。
他の部屋に寝ていた奴、全員に知られてしまうことになった。

「でさー?どこまでいってんの?あの二人」

「おそらく、幼い頃手を繋いだままでだろうな」

「えっ！まだ！？どんだけ長いんだよ」

「長いからこそということもある」

豪炎寺が言つとみんな、納得した様子だった。

「で？風丸はなんて？」

「この合宿では告白は絶対しないって」

半田が上のマックスを見た。

「だろうけど。じゃあどうするんだよ？いくら俺たちが協力したって言ってもらわなきゃどうしようもないだろ」

「それは俺たちの腕の見せどころだ」

「結局そうなるんだ」

「で、これからどうする……」

「うちに任じとき!」

「うわああああ!」

全員が一斉に驚いた。

見た方向にはリカが立っていた。

「なんやなんや? そんなビックリして……恋愛と言ったらうちやる
っ!」

ビシッと親指で自分を指差す。

「話は聞かせてもらって! 次は風丸が」

「だけど、これは勉強合宿……」

「わかってるわ。風丸とシーズンをくつければイイんやろ?」

「違うねー」

「とにかくや! 風丸が告白せーへんのならシーズンからさせればイ
イ話やで」

そこにはみんな納得した様子。

「ラブラブ大作戦開始や！」

恋といえは(11)後書き

蘭丸可愛いです。

蘭丸うううううううううう!!

作戦遂行中（12（前書き））

だんだんピンチになってきた。

更新が。

「シーズン、ありがとな」

「いやー、おにぎり作ったただけだし」

シーズンが風丸の姿を見ながらニコニコ笑った。

「ところで風……」

「シーズン！風丸！いいところに！」

シーズンがなにか言いかけたところでリカがやってきた。

「リカ！？」

「どうしたんだ？」

「今すぐ二人で出かけてき」

「……えっ？」

「いいからはよ！夏末に見つかったらえらいことなるで！？」

「でも私たち出かける気なんてな……」

「いいから！」

ぐいぐいと背中を押された。

「楽しんできーや」

「えっ？えっ？」

合宿所を追い出された。

「そんなこと言われても……勉強合宿じゃないの？」

シーズンが風丸を見た。

「……………」

目があった。

「せつかくだからどこか行くか」

「でもさ……」

リカがこっそりと二人の様子を見た。
その他数名。

「そこで風丸が無理やり手、引っ張ってくんやる!？」

「いや、風丸にはできない」

「同意」

鬼道が言つと半田が頷いた。

「どうすんねんな!」

「だからこつこついうのダメなんだよ!」

「こつこつでもしないと進まんねん!」

「……っ」

「風丸、どうし……」

「一緒に行こう！？なっ？」

「えっ？まあそこまで言うならいいけど」

「よっしゃっ！なんだかちやうけど第一段階は成功や」

リカがガッツポーズをした。

「あいつら本当に幼なじみ？」

「そう聞いている」

作戦遂行中（１２（後書き））

剣城デレたね。

まさかアレでデレるとは……！

それより蘭ちゃんのお可愛さハンパないな。うん。

偵察開始っ () 1 3 (前書き)

短いですっ。

偵察開始っ()13

「どこ行く?」

「そうだな……シーズンはどこ行きたい?」

歩きながら風丸が聞いた。

「んー……遊園地!」

「遊園地か。じゃあ行くか」

「やった」

「シーズンって意外と心得てるなあ」

「何を?」

「デートの基本や」

「ああ……」

シーズンが適当に言ったことをみんなは知っていた。

そんなことも知らず、シーズンと風丸は稲妻町の遊園地についた。

「うわー。風丸！見てみて！あれ！楽しそう」

シーズンがキラキラした目でジェットコースターを指差した。

「乗るか」

「うん！」

「楽しそうやな……。うちもダーリンと……」

リカが肩を落とした。

「一之瀬は一時帰宅してるんだろ？アメリカに」

「たしか、そうだ」

なんとなく和みムードになってきた。

が、

偵察開始っ (13) (後書き)

やっぱり夢小説はウケませんね。

”稲妻イレブン”の方はウケがいいですね。

ギャグセンスがほしいな。

シーズンちゃんのあるとk(14)前書き(

そろそろ稲妻の方も更新したいと思います。

ギャグセンス0ですが、稲妻もどうぞ。

シーズンちゃんのあるとk()14

「見いーつけた」

全員がビクツと震えた。
一斉に振り返る。

「あ、アフロディ……」

「へえーへえー。僕に黙ってシーズンちゃんを連れ出すなんてねえ
？」

アフロディが怪しく笑った。

「その笑顔が怖い」

「夏未さんがスツゴク怒ってた」

「だろうな」

「夕食抜きだつて」

「それは困るツス！」

「鬼道くん。僕がシーズンちゃんに告白したことは知ってるよね？」

「ええええええ！？」

鬼道と豪炎寺を抜かした全員が声をあげた。

「邪魔されたけどね」

「邪魔したかな」

「アフロディ！見かけによらず男前やなーっ！」

「ありがとう」

「風丸とはえらい違いだ」

「これが肉食系男子ってやつか」

「なるほど」

みんなが頷いた。

一方。

「スツゴく高いよ！風丸！」

「そうだな！」

「キヤーっ。超楽しい！」

「あ、二人がどっか行くで！？ほら、ついてき」

「全く。みんな、こつこつこの好きだよね」

宝の持ち腐れだねっ() (15) (前書き)

稲妻のネタ何にしようかなー。

てか、そろそろ更新止まりそうです。

というより、いちいちパソコンするのめんどくさ() (殴

あと3日位でしょうか？

なるべく早く更新するつもりです！

「次は？」

「ゲームセンター行く！」

「ああ。いつも通りだな」

「ゲームセンターやて！？プリクラや！プリクラ！」

「いや、シーズンは絶対撮らないぞ」

「撮ったことないな」

「てか、一つ聞いていいか？」

「なんだ？リカ」

「なんで、シーズンジャージやねん！他のマネージャーはみんな制服やるうが！」

リカがいきなり大声をあげた。

「シーズンはいつもめんどくさいってジャージだぞ?」

「もったいないやんか! シーズンって結構いいルックス持ってるちゅーのに!」

リカがだんだんカリカリしてきたところに…

「そういうのを”宝の持ち腐れ”って言うんだよ!」

「!?!」

「こらこら。緑川。乱入するのは……ってみんな。どうしたの?」

やってきたのは緑川とヒロトだった。

「なにか見てるのか?」

「今、シーズンと風丸がデート中なんや!」

「ええ!?! うそ! 俺も見たい!」

「緑川。ダメだよ。買い物途中なんだから。鬼道くん。後で教えてね。」

あと、田堂くんによろしく」

「わかった」

ヒロトが緑川の手を取って手を振りながら帰っていった。

「なんだっただ？」

「宝の持ち腐れ感も、シーズンちゃんのいいところだからね。僕はいいと思うよ？」

「アフロディ、優しいわ」

「これ、やるっ！」

「シーズン、リズム感が……」

「いいの！リズム感が死にそうな位ないけどいいの！」

「じゃあやるか」

「うん！」

「シーズン、あれ、出来ないじゃん」

「リズム感がないのは承知みたいだ」

「シーズンちゃんってそういうところが可愛いよね」

実践っ！(16)前書き

ギリギリ更新です。

ふう。今回は予約なしで頑張りました。

明日で間あけます！

すみません…。

なるべく早く帰ってきますっ！

あ、待ってないですか？そつですか。

実践っ！()16

「次はどこ行く？」

「えーと。……風丸は？さっきから私の行きたいところばかりだし」

「別に俺は……じゃあ、アイス食うか！」

「アイス！？食べる！」

「これは円堂と冬花的な展開やで！」

「風丸さんは見てたッスからね」

「実践する気か？」

「そつや！実践すればいいんや！」

「シーズン……」

シーズンと風丸が席に座ったところで風丸が話しかけた。

「ん？」

「デカイの頼まないか？」

「えっ？お金ないよ？」

「俺が払うから！」

「……なら、いいけど」

そして、

ドーンとそびえ立つデカイパフェが目の前に……

「うわー！美味しそう！」

「シーズン」

「？」

風丸が自分のスプーンを手に取り、アイスをのせた。
それをシーズンの前につきだした。

「え？」

「まさかの逆バージョンや！」

「なるほど……」

「シーズンが食べるかどうかやで！ここは風丸に甘えて食べさせてもらっとき！」

「風丸も頑張ったな」

「へ？え？」

シーズンは戸惑ってるし、風丸は顔を真っ赤にしているという状況が続いていた。

「…………ごめん。いらないよな」

風丸が苦笑いしてスプーンを引く。

突然、

シーズンが風丸の手を掴み、スプーンの上のアイスを食べた。

「…………つ／／／／／」

「…………ん。美味しい」

一方。

「…………うわぁ。ラブラブやん！」

「あれが本物だ」

「姪いちゃうね」

「……………」

主人公は天然（17（前書き））

しばしのお別れです。

まあ、あんまり読んでる人もいないと思いますが。

頑張って続き書きます。

主人公は天然（17）

「風丸も食べる？はい」

シーズンが風丸にスプーンの上にアイスをのせ、前に出した。

「……っ／／／」

「？」

シーズンが疑問顔で首を傾げた。

「シーズンって……天然なんか？」

「今頃だな」

「シーズンちゃんはハッキリ言わないと気づかないぐらい鈍感なんだよ」

「マジかいな……」

風丸の顔が真っ赤になった。

「え？ いらない？ 風丸が頼んだんじゃん！」

「いや、そういうことじゃないけど」

「じゃあ、はいっ。早くしないと溶けちゃうよっ」

「ん……うん」

風丸がスプーンとアイスを口に入れてアイスを食べた。

「美味しい？」

「あ、ああ。美味しい」

「じゃあ、食べようか！」

「そうだな」

「いいなあ……僕もシーズンちゃんにあーんってしてもらいたい」

「……うちもダーリンにしてあげたいわ」

「見てるこっちが恥ずかしくなるんだが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8091u/>

にやににゆにえによつ！

2011年10月6日17時14分発行